

吉川英治

三國志

四

悠久の大自然と治乱興亡果てない大陸の歴史が育くんだ複雑な中国
の人和心。魏蜀呉三國の覇権と政治の妙に学ぶ生甲斐と身の処し方。

六興出版

吉川英治

三国志

第四卷 臣道の巻

三国志 第4巻（全10巻）

平成2年2月20日 初版印刷

平成2年2月25日 初版発行

著者 吉川英治

発行者 賀来壽一

発行所 株式会社六興出版

〒112 東京都文京区水道2-9-2

電話 03(943)3431(代表)

振替 東京1-92448

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

©1990 Fumiko Yoshikawa. Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

ISBN 4-8453-0214-4 C0093

目

次

兇門脱出	雷怯子	青梅、酒ヲ煮テ、英雄ヲ論ズ	鶏鳴	油情燈心	秘勅を縫う	許田の獵	白門樓始末	破瓶	煩惱攻防戰
83	74	65	61	48	41	30	22	15	3

偽帝の末路……………91

霧
風
.....
97

一書十萬兵……………102

承相旗
.....
108

112

不戰不和……………119

奇舌学人……………127

雷鼓

鸚鵡州 144

大
医
吉
平
……
151

美	童	159
火	か 人 か	170
小	児 病 患 者	177
玄	徳 冀 州 へ 奔 る	181
恋	の 曹 操	188
大	歩 す 臣 道	198
破	衣 錦 心	207
白	馬 の 野	215
報	恩 一 隻 手	220
黄	河 を 渡 る	226

燈 風 避

の

花 客

便

占 り 牌

.....

.....

.....

246

240

231

臣
道
の
巻

煩惱攻防戰

一

呂布は、櫓に現われて、

「われを呼ぶは何者か」と、わざと言った。

泗水の流れを隔てて、曹操の聲は水に飜して聞こえて来た。

「君を呼ぶ者は君の好き敵である許都の丞相曹操だ。——しかし、君と我と、本来なんの仇があろう。予はただ御辺が袁術と婚姻を結ぶと聞いて、攻め下って来た迄である。なぜならば、袁術は皇帝を僭称して、天下を素す叛逆の賊である。かくれもない天下の敵である」

「……………」

呂布は、沈黙していた。

河水をわたる風は白く、蕭々と鳴るは蘆荻、翩

翩とはためくは両陣の旌旗。その間一すじの矢も飛ばなかった。

「予は信じる。君は正邪の見極めもつかないほど愚かな將軍ではないことを。——今もし戈を伏せて、この曹操に従うならば、予は予の命を賭しても、天子に奏して君の封土と名譽とを必ず確保しておみせしよう」

「……………」

「それに反し、この際、迷妄に囚われて降らず、君の城郭もあえなく陥落する日となつては、もう何事も遅い、君の一族妻子も、一人として生くることは、不可能だろう。のみならず、百世の後まで、悪名を泗水に流すにきまつている。よくよく賢慮し給え」

呂布は動かされた。それまで黙然と聞いていたが、やにわに手を振り上げ、

「丞相丞相。しばらくの間、呂布に時刻の猶予をかし給え。城中の者とよく商議して、降使をつかわすことにするから」

傍にいた陳宮は、意外な呂布の返辞に愕然として跳び上がり、

「な、なにをばかなことを仰っしゃるかっ」

と、主君の口を塞ぐように、突然、横あいから大音声で曹操へ言い返した。

「やよ曹操。汝は、若年の頃から口先で人をだます達人だが、この陳宮がおる以上、わが主君だけは欺かれんぞ。この寒風に面皮を曝して、無用の舌の根をうごかさずと、早々退散しろ」

言葉の終わった利那、陳宮の手に引きしぼられていた弓がふんと弦鳴を放ち、矢は曹操の盔の眉庇にあたつて刎ね折れた。

曹操は、くわつと、毗をあげて、

「陳宮ッ、忘るるな。誓つて汝の首を、予の土足に踏んで、今の答えをなすぞ」

そして左右の二十騎に向かつて、即時、総攻撃にうつれと峻烈に命じた。

櫓の上から呂布はあわてて、

「待ちたまえ、曹丞相。今の放言は、陳宮の一存で、此方の心ではない。それがしは必ず商議の上、城を出て降るであらう」

陳宮は、弓を投げつけて、ほとんど喧嘩面になつて言った。

「この期になつて、なんたる弱音をはき給うことか。曹操の人間は御存じであらうに。——今、彼の甘言にたばかられて、降伏したが最後、二度とこの首はつながりませんぞ」

「だまれつ、やかましい。汝一存をもつてなにを吠ゆるか」

呂布も躍起となつて、言い争ひ、果ては剣に手をかけて、陳宮を成敗せんと息巻いた。

敵の目からも見ゆる櫓のうえである。主従の喧嘩は醜態だ。高順や張遼たちは、見るに見かねて、二人を押し隔て、

「まあ、御堪忍ください。陳宮も決して自分のために、面を冒して言っているわけではなし、皆忠義

の送りです。元来、忠諫の士です。今、唯一つのお味方を失つては決していい事はありませんまい」

呂布も漸く悪酔のさめたようにほっと大息を肩でついて、

「いや、ゆるせ陳宮。今のは戯れだ。——それより何か良計があるなら惜しまず俺に教えてくれい」と、言い直した。

二

呂布には、ほとほと愛想もつきたらしい陳宮であったが、かりそめにも主君である。その主君から頭を下げて機嫌をとられると、彼は又、忠諫の良臣となつて粉骨砕身せずにはいられない氣持になつた。

「良計は無きにしも非ずですが」

陳宮も辞を低うして答えた。

「ただお用いあるか否かが問題です。ここに取るべき一策としては『掎角の計』しかありません。將軍は精兵を率いて、城外へ出られ、それがしは城に

在つて、相互に呼吸をあわせ、曹操をして、首端の防ぎに苦しめるものであります」

「それを掎角の計というか」

「そうです。將軍が城外へ出られれば、必ず曹操はその首勢を、將軍へ向けましよう。すると、それがしはすぐ城内からその尾端を叩きます。又、曹操がお城の方へ向かえば、將軍も転じて、彼の後方を脅やかし、かくして、掎角の陣形に敵を挟み、彼を屠るの計であります」

「ムム、なるほど、良計良計。孫子も裸足だろう」

呂布は、たちまち、戰意を昂めて、たちどころに出城の用意を言い出した。

山野に出れば、寒氣は殊に烈しくろうと想像されるので、將士はみな戰袍の下に綿衣を厚く着こんだ。

呂布も奥へはいつて、妻の嚴氏に、肌着や毛皮の胴服など、氷雪を凌ぐに足る身支度をととのえよと吩咐けた。

嚴氏は、良人の容子を怪しみながら、

「いったい、何処へお出ましますか」と、たずねた。

呂布は、城を出て戦う決意を語って、

「陳宮という男は、実に智謀の囊のような人間だ。

彼の授けた掎角の計をもつてすれば、必勝は疑いない」と、慌ただしく、身に物の具を纏い出した。

すると嚴氏は、

「まあ、ここを他人の手に預けて、城外へ出ると仰せなさいますか」

色を失った面持で、急にさめざめと泣き出した。

そして、なお、掻き口説いて、

「あなたは、後に残る妻子を、可哀そうともなんとも思いませんか。陳宮の考えだそうですが、陳宮の前身を思うてごらんなさい。あれは以前、曹操と主従の約をむすんでいたのを、途中から変心して、曹操を見捨てて奔った男ではありませんか。——ましてあなたは、その曹操ほども、陳宮を重く用いては来なかったでしょう」

「……………」

妻が真剣に泣いて訴えはじめたので、呂布は途方に暮れた顔をしていた。

「……ですもの、陳宮が、どうして曹操以上に、あなたへ忠義を励みましよう。陳宮に城を預けたら、どんな変心を抱くかしたものではありません。……そうなたら、妾たち妻子は、又いつの日、あなたに会うことができましよう」

綿々と、恨みつらみを並べた。

呂布は、着かけていた毛皮の鎧下を脱ぎすてて、
「ばか、泣くな。戦の門出に、涙は不吉だ。明日にしよう、明日に」

急に、そう言つて、

「娘は何をしているか」

と妻と共に、娘たちのいる部屋へ入って行った。

明日になつても呂布は立つ気色もない。二日も過ぎ、三日も過ぎた。

陳宮が又、顔を見せた。

「將軍。——一日も早く城を出て備えにおかかりな

さらないと、曹操の大兵は、刻々と城の四圍に勢を張るばかりですぞ」

「や、陳宮か、おれもそう思うが、やはり遠く出て戦うよりは、城に居て堅く守るが利という気もするが」

「いや、機はまだ遅くありません。この日頃、許都の方からおびたらしい兵糧が曹操の陣地へ運送されて来るといふ情報が入りました。將軍が兵をひいて城外へ出られれば、その糧道も併せて断つことができます。——これ一挙兩得です。敵にとつては致命的な打撃となること、いうまでもありません」

三

「なに。曹操の陣へ、都から兵糧の運送が続々と下つて来ると。……フム、その途を中断するの。よし、明日は兵をひいて城を出よう」

たちまち、呂布は肚をきめて、鬪志燃ゆるが如き面をして言ったので、陳宮も安心して、

「何とぞ、この機を外さず」

と、わざと多言を吐かずには退いた。

その夜、呂布は貂蟬の室へはいった。見れば、貂蟬は帳を垂れ泣き沈んでいる。どうしたのかと訊くと、海棠の雨に打たれたような臉を紅に腫らして、「もう再びこの世で將軍とお会いできないかと思うと泣いても泣いても足りません。行く先誰をたのみに世を送りましょう」と、なお悲しんだ。

「何をいう。おれはこのとおり健在ではないか。この城にはまだ冬を越す兵糧もある。万余の精兵もある」

「いいえ、妾は夫人から伺いました。將軍は妾たちをすてて、お城をお出になるのでしょうか」

「勝利を獲るために出て戦うので何も好んで死地へ行くわけではないよ」

「……でも。……でも案じられます。なぜならばお留守をあずかる陳宮と高順とは、日頃から不和で、將軍がお城にいないければ、きっと敵に虚をつかれて

乱れます」

「二人はそんなに仲が悪いのか」

「わけて陳宮ちんきゆうという人の肚はらはわかないと、夫人も憂うれいていらつしやいます。——將軍、お娘様こさまもおいといではございせんか。夫人や妾めかけたちも不慙ふげんと思おもうてくださいませ」

貂蟬ちようせんは、呂布の胸へひたと涙の顔をあてた。

呂布はその肩を軽く打つて、

「あはははは」と強つよいて大笑した。

「他愛たあいないやつだ。泣なくな、もう悲しむな。城を出ることは止やめたしたよ。おれに画檣がかんの戟ほこと赤兔馬せとばのあるうちは、天下の何人なんびとだろうが、この呂布を征服することができものか。——安心せよ、安心せよ」
背をなでて、俱ともに牀しやうへ憩いこい、侍女じよに酒を酌くませて、自ら貂蟬の唇くちびるへ飲のみませてやつた。

次の日。こんどは彼も少し間まが悪いとみえて、呂布のほうから陳宮を呼びにやつて、さて、陳宮の顔を見ると言った。

「念のためおれが探さがらせたところでは敵の陣へ都から続々兵糧ひやうりやうが運送されつつあるとの報告は、どうも虚報きやうほうらしいぞ。案ずるところ、おれを城外へ誘い出そうとする曹操のわざと言わせている流言りやうごんにちがいない。そんな策てに乗のつたら大不覚だ。おれは自重じちやうするときめた。城を出る方針は中止とする」

陳宮は、彼の室へやを出ると慨然がいぜんと長太息して——

「……ああ、もはや何をか言わんやだ。われわれは遂ついに身を葬ほうむる天地もなくなくなるだろう」

と、力なく言った。

それからというものの、呂布は日夜酒宴しやくえんに溺おぼれて、帳とばりに秘かくれれば貂蟬ちようせんと戯たむれ、家庭にあれば嚴氏げんしや娘に守られて、しかも酒が醒めれば怏々やうやうとしていた。

「折入せいりつてお目通りねがいたい儀ぎがございまして——」

と、侍臣を通じて許しを得、彼の前に拝をなした二人の家人がある。

許汜きよしと、王楷おうかいだった。

二人とも陳宮の部下に属している者なので、

「何だ」と、呂布は警戒顔して言う。

王楷がまず言った。

「聞説——淮南の袁術は、その後も勢力甚ださかんな由であります。將軍には先に、御息女をもつて袁家の息にゆるされ、婚姻の盛儀を挙げんとまでなされましたのに、なぜ今、疾く使いを馳せて、袁術の救けをお求めになりませんか。——婚約の事も、まだ破談ときまつたわけでもなし、臣等が参つて篤と先方に話せば、たちまち諒解を得られようと思われませんが」

四

「そうだ。……あの縁談も破談となり終わつたわけではないな」

呂布は暗中に、一つの光明を見出したように呟いた。

そして、二人の臣へ、

「では、其方たちが、進んで淮南へ使いに立つと申すか」

「不肖なれど、御当家の浮沈にかかわる大事、一命を賭して、致したいと存じます」

「殊勝、殊勝。よく言ってくれたぞ。——では早速、袁術へ宛て、書簡をしたためるからそれを携えて、淮南へ急いでくれい」

「御命、かしこまりました——しかし、この下邳の城は、すでに敵の重囲にあり、又、淮南の通路は、劉玄德が関をもうけて、往来を厳しく監視しておりますとか。……何とぞ臣等の使命のため、一軍の兵をお出しあつて、通路の囲みを突破して戴きたく存じますか」

「よろしい、さもなくば淮南へ出ることは叶うまい」

呂布は、直ちに張遼、郝萌の二大將をよび、各々へ五百余騎をさずけて、

「両名を淮南の境まで送るよう」と、いいつけた。